住民による住民のための浜松まつり

文＝東 浩紀　写真＝鈴木 勝

浜松まつり

450年以上の伝統を持つと言われる浜松まつりは、毎年5月3日、4日、5日に開催。町ごとに子どもの誕生を祝って凧を揚げる「初凧揚げ」、凧同士が互いに糸を切りあう「凧揚げ合戦」、豪華絢爛な「御殿屋台曳き回し」、町衆が町内を練り歩く「練り」など、多彩な行事が繰り広げられる。当初は浜松市中心部だけの祭りであったが、次第に郊外にまで浸透。市町村合併により浜松市が巨大化する中で、近年では市内の170を超える町が参加し、3日間で延べ200万人前後の人出で賑わう祭りに発展した。単一の祭りとしては、世界一、参加人数が多く、参加地域の面積が広いと言われる。1986年に「浜松まつり凧揚げ保存会」がサントリー地域文化賞受賞。

異世界に迷い込んだかのような

五月四日の午前一〇時半。新幹線で浜松駅に着いたぼくは、編集者と合流するとすぐに車で会場に向かった。浜松まつりの凧揚げは、駅から南に約五キロ、中田島砂丘近くに整備された広大な「凧場」で行われる。会場が近づくと、そろいの法被を着た人々がぞろぞろと向かうすがたが目に入る。

軍隊で使われるビューグル。かなり年季が入っている。

車を降り、保安林を抜けて会場に向かう。ますます法被姿ばかりになる。よく見るとさまざまなデザインがある。町ごとに工夫が凝らされているようだ。「世話人」「取締役」「相談役」など、ふしぎな肩書きの入ったタスキを掛けた参加者もいる。

祭りの運営と当日の安全を担う統監部のメンバー。

ぱっぱぱっぱぱっぱぱっぱ、ぱっぱぱっぱぱーと、進軍ラッパの音が遠くから聞こえてくる。灰色のダブルのスーツを着こみ、戦前の海軍を思わせる制帽を被った高齢男性たちが、「統監部」という聞きなれない名称のテントの下に集まっている。ふとまわりを見回すと、同じようなテントがずらりと並んでいる。テントのまえには大凧が立てかけられ、まだ昼前だというのにあちこちで酒宴が始まっている。ぼくは異世界に迷い込んだような、奇妙な目眩を覚えた。

初凧が無事あがると、両親と赤ちゃんを肩車。

浜松まつりの起源は、いまから四五〇年前、永禄年間の引間城（のちの浜松城）主が長男誕生を祝い、大凧をあげた逸話にあることになっている。とはいえ、当時それが定例の行事として定着したわけでもない。この地方ではそののち、あちこちで端午の節供に長男の誕生を祝って凧をあげる「初凧」の習慣が自然発生的に生まれ、あわせて凧合戦も行われるようになり、それが明治以降に「大凧合戦」として一箇所にまとめられたという経緯が正確なようだ。この経緯からもわかるように、浜松まつりは、「まつり」と名づけられてはいるものの、神事とはいっさい関係がない。民俗学的な背景もない。それは、浜松市民が、浜松市民のために浜松市民の手で運営している、徹底して「住民のための」お祭りである。

それゆえ観光客もほとんどいない。二〇一九年の人出は公式発表によれば延べ二〇九万人。浜松市の人口は約八〇万人なので、これは驚きの数字だ。会期は三日間だというのに、市民ひとりあたり単純計算で二回以上来場していることになる。ぼくは東京生まれの東京育ちだが、住民全員が平均して地元のお祭りに二回以上行くなどという現象は、東京では絶対に考えられない。異世界に迷い込んだかのような気がしたのは、そんな市民の熱気にあてられたからだろう。

軍国主義の痕跡？

呆然と立ち尽くしていると、実行委員会の方から町名の入らない法被を手

渡された。法被は祭りへの参加資格の証明でもあり（具体的には事故時の保険料などの納入証明であり）、着用しないと凧場には入れないという。Tシャツ一枚でも汗ばむほどの陽気だったが、この場で遠慮は考えられない。感謝の言葉を述べて袖に手を通すと、ようやく落ち着いて取材を始めることができた。

会場は凧場と「陣屋」のエリアに分かれている。陣屋とは町あるいは地区ごとの待機所のことで、同じかたちのテントがずらりと二〇〇近く並んでいる。それぞれのテントのなかでは、同じデザインの法被を着た老若男女が集まって歓談している。雰囲気は同窓会や親戚の集まりを思わせる。ぼくたちが現地に到着したのは一一時過ぎ、ほんとうなら凧合戦が始まっている時間だが、今年は風が弱く待機中の町が多いようだ。前述のように、昼前なのにあちこちで、暇を持て余した男たちによって酒盛りが始まっていた。

盛りあがるテントのひとつにお邪魔した。すぐに缶ビールを手渡される。編集者に目配せし、喜んでいただくことにする。

陣屋のあいだをビール片手に熱で浮かされたように歩いていると、ふたたび音楽が聞こえてきた。ラッパ（ビューグル）を片手に行進する子どもたちに続き、両手で大凧を掲げた大人たちが上気した顔で歩いていく。凧場に向かう人々、あるいは無事凧をあげ終わり凧場から引きあげてくる人々だ。進軍ラッパがこんなに誇らしげに奏でられる光景は見たことがない。

浜松まつりは大正時代、会場を浜松駅の北にある和地山練兵

浜松まつりには大勢の外国人が参加している。左端が筆者。

子どもも大人と同じラッパで、値段はなんと1万5千円以上。

場（現在の和地山公園）に移したことがある。進軍ラッパはその名残りだが、市民はそんな起源はほとんど気にしていないようだ。

軍国主義の痕跡はほかにもある。さきほど記したように、会場には「統監部」という聞きなれない言葉が掲げられている。統監部は「企画統制監理部」の略称で、どうやら浜松まつりの現場運営業務の頂点にいる人々を指しているらしい。その名称は軍の組織を想起させるし、じっさい統監部の人々は軍服を思わせる制服を着用している。高齢者が軍装をまとい、子どもが進軍ラッパを吹いている。よそ者にはいささかぎょっとする光景だが、浜松の人々にはそれはあまりに自然で、違和感を与えないようだ。ラッパや制服の起源をしつこく尋ねるぼくに対して、観光協会のかたは怪訝な顔で首を振り、かわりに、浜松の子どもはみなあのラッパをひとつはもっているのだと嬉しそうに語ってくれた。

中心はどこにもない

祭りの中心は凧揚げだ。初子の誕生を祝し、名を記した「初凧」をあげる——というのが本来だが、そこは住民の住民による住民のための浜松まつり、原則に囚われることなく柔軟に運営されている。兄弟の名が記されていることもあるし、複数の家族が資金を出し合ってひとつの凧をあげることもあるようだ。今年は、新年号「令和」が子どもの名のように記されている例もあった。

初凧は「十帖」、すなわち八畳に相当する面積をもつ巨大な凧である。それを空中にあげ、静止させるのは並たいていのことではない。老若男女が息を合わせて糸を引き、凧が風を受けて安定すると、進軍ラッパが鳴り響き、おいしょおいしょとリズミカルな掛け声とともに人々がぐるぐると回って（「練り」と呼ばれている）、万歳が三唱される。そんな光景が、凧場のあちこちで同時に繰り広げられる。町衆同士が衝突していないところを見ると、おそらく順番や場所の割り当てがあるのだろうが、初見のぼくにはとてもわからない。ここで凧があがったと思ったら、あそこで凧が落ちる。あちらで歓声が上がったと思ったら、こちらで落胆の声が聞こえる。凧場を出て行く町内会もあれば、凧場に入ってくる町内会もある。空を見上げれば、三〇から四〇の色とりどりにデザインされた大凧が漂っている。

壮観ではある。賑やかでもある。みんな楽しそうでもある。けれども住民でないぼくには、いったいどこに注目すればいいのかさっぱりわからない。事前の案内によれば、その日は初凧の掲揚だけでなく、町同士が凧を戦わせる「糸切り合戦」も行われる予定だった。けれども、それもいったいどこで行われているのか、そもそも行われているかどうかもさっぱりわからない。アナウンスも聞こえない。同行した編集者も当惑し苦笑している。

ぼくたちは近くの防潮堤にのぼり、会場全体を見渡すことにした。防潮堤は東日本大震災後に建設されたもので、高さは一三メートル。取材後に調べたところでは、総延長は一八キロ近くにおよび、凧場近くも完成の直後だったらしい。かつて凧場は砂浜へそのまま続き、凧は海風を背に受け舞い上がっていたはずだが、いまや両者は防潮堤で隔てられ糸を引きながら海を臨むことはできない。市民の安全を考えるとやむをえないのだろうが、どこか寂しい気もする。参加者はどう考えているのだろうか。

浜松まつりはコミケなのだ

防潮堤に立ち、ようやく祭りの全貌が目に入った。大きく広がる緑の長方形。そのなかをたがいに移動し、安全な距離を調整しながら凧揚げを競いあう三〇ほどの集団。ときおり聞こえる歓声。その外側には、二〇〇近いテント群が整然と格子状に並んでいる。そしてその隙間を、ラッパを鳴らしながらゆっくりと凧とひとが移動している。中心はどこにもない。だれも制御していない。でもはっきりとした秩序がある。そしてみなが笑っている。

凧のデザイン「凧印」は町ごとに異なる。

凧場と海を遮る防潮堤の建設には、企業や市民から多くの寄付が寄せられた。

その光景はぼくに、かつて通っていたコミック・マーケット（コミケ）、東京で年二回開催されるあの巨大な同人誌即売会を思い起こさせた。コミケは、オタクたちのオタクたちによるオタクたちのための祭典だ。何十万人という人々を動員し、その人々にとっては欠かせない定例行事となっている。けれど、関係ないひとにはまったく関係がない。そしてコミケにもまた中心がない。空間的にも時間的にも制度的にも中心がない。開場から閉場まで、ただみんなで巨大な空間に集まり、机をずらずらと並べて本を売ったり買ったりする、それがコミケのすべてである。だからコミケは客という言葉を使わない。同人誌を売るひとも同人誌を買うひとも運営もすべて同じ「参加者」だというのが、コミケの哲学だ。

そのことを思いだして、ぼくはようやく合点がいった。浜松まつりはコミケなのだ。だからそこには客はいないのだ。参加者以外の人間はいないのだ。観光客向けのアナウンスもないし、タイムテーブルもないのだ。そしてそれでいいのである。祭りは、なによりもまず参加者のためにあるのだから。

法被を着用していない人は入れない凧場。かつては女性も入場できなかったという。

祭りそのものを祝う

浜松まつりは昼だけでは終わらない。夜は「御殿屋台」と呼ばれる一種の山車が町を練り歩く。御殿屋台の起源は、凧を乗せた大八車だったという。最後に夜についても少し触れておく。

浜松まつりは、前述のとおり神事と関係がない。だから御殿屋台の順路にもとくに宗教的意味はない。市街地を数百メートル封鎖して、そこをぐるぐると回るだけだ。

彫刻の題材は、子どもの成長を願うもの、縁起ものなど、町ごとに趣向が凝らされている。

巡回路の中心にはちょっとした高台が設けられ、そこに「浜松まつり組織委員会」の歴々が座る。二人の委員長のうち、ひとりは市長だ。

屋台の引き回しのまえに「練り」と呼ばれる行事がある。いくつかの町の町衆がすりあしで集団で行進し、高台のまえにまできて、太鼓を叩き、ラッパを鳴らし、おいしょおいしょと独特の掛け声に合わせて腕をあげる儀式が行われる。リズムは徐々に早くなり、あるとき終わりがきて、拍手のあとに万歳となる。市長もそれに万歳で答える。それは政治的には危うくも見える光景だ。市民が、一段高いところにいる市長をまえに、万歳を三唱しているのだから。

けれども、そこで市民たちは権力の永続を願っているわけではない。彼らが唱えていたのは「浜松まつり万歳」という言葉だ。彼らはなにを祝っているのでもない。強いていえば、自分たちの祭りそのものを祝っているのだ。それはなにか、日本の祭りの本質をえぐり出しているように、ぼくには思われた。

（あずまひろき・批評家）

町内を練り歩く町衆に初子の家や篤志家が酒肴を振舞う。

市内中心部の大通りに各町の練りが集結する。

薄化粧をして屋台の上でお囃子を奏でる子どもたち。